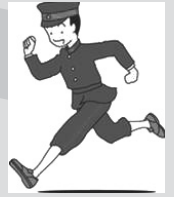


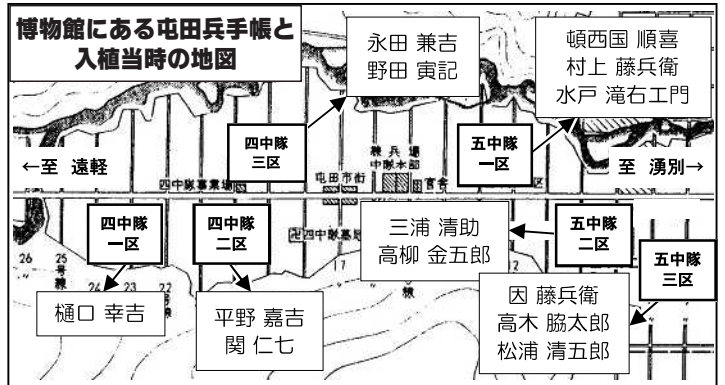
まだまだ見つかる、屯田兵の資料



屯田兵の資料の中でも最も貴重な資料の1つ、「屯田兵手帳」。今年は五十嵐優さん（中湧別南町）から、一冊寄贈していただきました。その手帳は明治30年に熊本県から北兵村一区に入植した「頼西国順喜」さんの手帳でした。

399冊中、13冊目の貴重な手帳

湧別兵村の屯田兵は399人。屯田兵の様々な資料は博物館にて保管・展示されていますが、資料を見ただけで誰のものか判別できるものはそれほど多くありません。その数少ない1つが「屯田兵手帳」です。各個人に1冊ずつ支給され氏名も書かれてるため、2つと同じものがなく、湧別兵村を語る上で欠かせない貴重な資料です。その手帳、博物館で保管されているのは全部で13冊です（右図参照）。



「屯田兵手帳」何が書いてある？



『屯田兵手帳：頼西国 順喜』 寄贈 五十嵐 優さん

屯田兵手帳には、屯田兵としてあるべき心構え等の規律だけでなく、多くの個人情報も記されています。年齢・出身地や家族構成、顔写真の代わりに個人を特定する「目は大、鼻は小、髪は濃密」などの個人情報、「△月△日、米6斗7升を支給」「○月○日、靴を支給」等、様々な支給品目について日時とともに細かく記載されています。

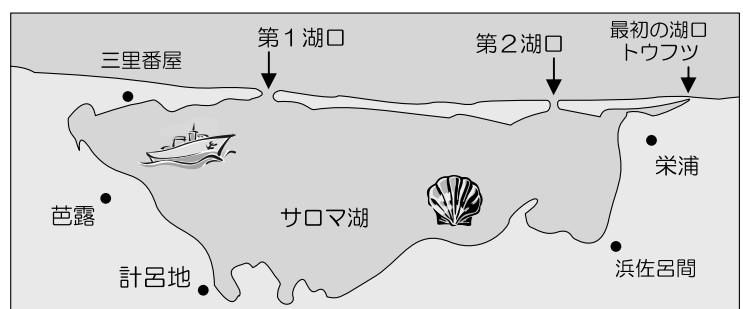
そのような、屯田兵の現役期間中の情報が盛りだくさんの手帳は当時の屯田兵制度を調べる際に大変貴重な資料です。ご家庭・ご親戚でもし屯田兵手帳をお持ちでしたら、博物館への寄贈をご検討ください。

意外と知らない？湧別の歴史 その①

現在、サロマ湖は2か所でオホーツク海とつながっていますが、昔は常呂側の1か所（トウツツ）だけ。しかもその湖口は冬～春にかけて閉じてしまうため、川からの流水等が溜まり水位が大きく変動し、農耕への障害をもたらし、冬山造材の積み出しや湖内漁業者へのオホーツク沿岸進出を阻害する悪影響をもたらしました。そのため、100年程前より地域住民による湖口開削は大きな目標となったのです。

何度もの開削工事の末、昭和4年、気候に助けられ、三里番屋近くに永久湖口ができました。それにより、一年を通じ水位が安定し水害が減るだけでなく、それ以外にも大きな恵みも得られました。それは多様な魚介類が生息できる環境です。海と水位が同じになり、塩分を多く含んだ汽水湖となることで、ホタテの養殖地として全国的に知られるようになったのです。

サロマ湖に美味しいものが多いのは、湖口ガキ!



サロマ湖 【面積：150km²】日本第3位の広さ。汽水湖では日本1！
基礎情報 【周囲：90km】 【深さ平均：14m(最深部：18m)】

時期（西暦）	湖口に関する主な出来事
明治12年（1879）	サロマ湖口が季節により閉塞する記録が残る
明治33年（1900）	常呂村漁師らが湖口開削を春に行い始める
大正8年（1919）	三里浜の人々、船を砂丘越しに運んで漁を始める
大正14年（1925）	三里浜の人々、15・6人で最狭部の開削開始
昭和2年（1927）	村営事業として湖口工事を採択される
昭和4年（1929）	湖口開削完了！（80人9日間の作業の末）
昭和53年（1978）	第2湖口（常呂側）の開削完了。